（昭和五年五月廿四日第三種郵便物認可）　昭和十五年七月二十日　千曲時報　第百二十三號　（一）

毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵稅共六十錢）

發行兼編輯人　長野縣上田市　小松忠一郎
發行所　上田市　千曲鐵絲專門學校會
印刷所　長野縣上田市原町　中澤印刷所

滿洲國視察概要

井上柳梧

著者は滿洲國の柞蠶業の見學を主とし且つ開拓移民の狀況を視察する目的を以て、昭和十五年四月二十七日に上田を出發して同年五月十八日に歸校したのである、此旅行中通過した都市は次の樣である。

安東—新京—哈爾濱—佳木斯（ダイモス）—牡丹江—圖們—吉林—通化—輯安—滿浦鎭（朝鮮）

次に視察要項に就き叙述す。

(一)滿洲の柞蠶業

滿洲に於ける柞蠶業は約二五〇年前山東人が移住して以來、起りたるものであつて五〇年前より著しく發達したのである。而して盛時には產繭額は八〇億粒に達し大豆、石炭に次ぎ高粱、粟に匹敵するものである。日本への輸入は盛時には二千萬圓以上に達した事がある。以前は蓋平地方が柞蠶業の中心地であつた。尙ほ芝罘も盛であつたのであるが日露戰爭後安東に中心が移つたのである。

柞蠶繭の產額は大正五年には四五億粒であつたが次第に增加して前記の樣に八〇億粒になりしが滿洲事變後一時激減し現今では四〇—五〇億粒で其價格は一五〇〇万圓である。

柞蠶繭繰絲工場は安東に五一位あり是れに次ぎて海城、蓋平等にも工場は多いのである。著者は安東に於て義泰祥工場を視察した、本工場は繰絲工場の外に織物工場もある。繰絲工場の方は十二年前視察した時と餘り變つて居らないには驚いた。板上繰絲が行はれ全く原始的である「クリー」によつて繰絲せられ機械は座繰機であり機械の側に宿泊する狀は少しも昔と變つて居らぬ。然し織物工場の方は大に進歩して居る樣に見受られた。仕上には「テンター」も使用されて居る。

滿洲柞蠶の產繭は一七%が芝罘方面に輸出せられ殘りの八三%は各工場及農家にて製絲せらるゝのである。絲は七〇%は日本に他は上海方面に輸出し加工の上更に米國及歐洲に輸出せらるゝのである。

(イ)柞蠶飼育

飼育の盛んなる地方は蓋平、海城、岫岩、鳳城、安東、莊河、寬甸、西豐、西安、桓仁等である。近年次第に北方に移る傾向あり。

飼育は野外に於て行はるゝを以て減蠶歩合は非常に多く孵化したる幼蟲の七〇—八〇%は飼育中に斃れ結繭するものは僅かに二〇%內外なり。

減蠶の原因として次の三つが數へられて居る。

A、氣候不順及鳥害蟲　一〇—二〇%

B、微粒子病　二〇—三〇%

C、膿病　四〇—五〇%

即ち大部分は膿病によるものと考へらる

飼育上の收支關係

柞蠶飼育面積の單位として一把剪子（イパチエンツ）と云ふ言葉が使用せらる是れは一人が剪子を持ちて樹を切りつゝ適當に飼育し得る範圍を謂ふのであつて地方によりて其面積及樹數が異るのである、例へば西豐縣では一、六〇〇—一、六五〇本であるが地方に於ては四、五千本を算へ面積は一〇〇畝位である。然し是れは確實のものではないのである。

大體に於て面積は三町歩位である。

少し古い調査であるが康德四年春の相場を標準として支出入の關係を示して見れば次の樣である。

支出總計（春繭）

五四圓九〇錢

內譯

蠶場費　收繭の三割（六、〇〇〇粒）　三六四〇〇

外敵蟲防費　三、五〇

種繭購入費（三、〇〇〇粒）　三二、〇〇

蠶具損料　一、〇〇

稅金　三、四〇

雜費　—

收入總計　一二四圓五〇錢

內譯

良繭（三〇、〇〇〇粒）　一二四四〇〇

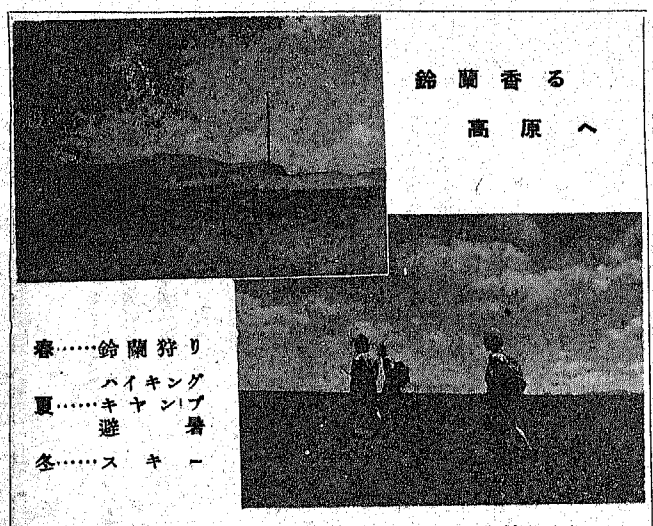
運動用具
理化器械
化學藥品
度量衡
計量器
掛圖全般
は弊店へ

カルニユー顯微鏡
山田体育機械
森本運動具店　長野縣代理店
日本出版社

信濃教育品株式會社
サトウ商店

東京本店　電話日本橋(24)六六番
長野支店　電話二七三四番
篠ノ井支店　電話一四一番
上田支店　電話五七三番
松本支店

鈴蘭香る
高原へ



春……鈴蘭狩り
夏……バイキング　キャンプ　避暑
冬……スキー

スキーコース、宿泊等は御問ひ合せ次第御回答致します

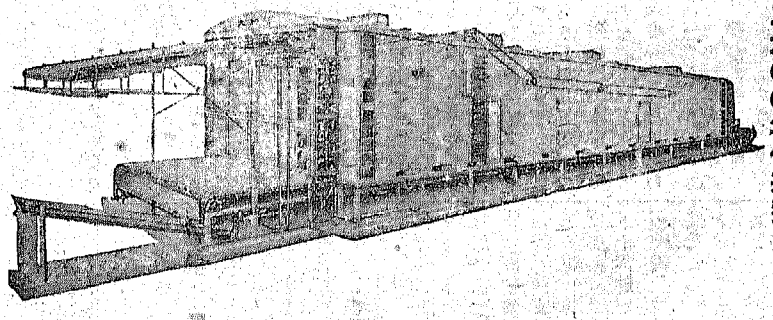
千曲會指定旅館

信越線上田驛前　上村館　電話上田344
長野縣菅平高原　菅平ホテル　電話菅平局1番
長野縣菅平高原　鐵道省山の家　電話菅平局呼出

現代乾繭機界ノ王座

大和式自動輸送乾繭機

【各種型錄贈呈】



二六〇〇年代表型

製作發賣元
株式會社
大和三光商會
東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇〇番
〃　〃　五二〇〇番
〃　〃　一七四三番

營業課目
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動人絹乾燥機
特許帶川三光式乾燥裝置
特許やまとネイロ
特許サンコー式濾過淨水裝置
特許サンコー式廢湯吸熱器
特許サンコー式高壓ポンプ
特許サンコー式トラップ

不良繭（五、〇〇〇粒）	三、〇〇
出殻繭（三、〇〇〇粒）	一、五〇
差引利益金　六九圓六〇錢	

秋繭は春繭に比して一般に安價である。次に一例を擧ぐ。

支出總計（秋繭）　二八圓九〇錢	
内譯	
繭場費收繭の二割（一〇、〇〇〇粒）	一二、〇〇
外敵豫防費	三、五〇
種繭購入費	一〇、〇〇
蠶具損料・	一、〇〇
税金	二、四〇
雜費	―
收入總計　六七圓三〇錢	
内譯	
良繭（五〇、〇〇〇粒）	六〇、〇〇
不良繭（八、〇〇〇粒）	四、八〇
出殻繭（五、〇〇〇粒）	二、五〇
差引利益金　三八圓四〇	

次ぎに柞蠶繭の製絲に就きて述べる。

（ロ）柞蠶繭製絲

滿洲に於て製絲原料として使用せらるゝ繭は秋繭にして春繭は多くの場合秋蠶の種繭となるものである

柞蠶繭の製絲法は十二年前と少しも進歩して居らざるは一驚を喫した次第である。大釜一、〇〇〇―二、〇〇〇粒の繭を入れて煮沸する此時曹達ホルマリン、麻子油等の藥品を混合したる水を入れる。かくして一時間煮沸する若し藥品を加へざる場合には四時間煮る。煮詰めたる繭は更に藥水に入れて冷却する。かくして煮繭を終りたる繭は是を盆に入れて繰絲者に渡すのである、此時一盆の中には一一五粒這入る。而して一日一人は八盆と決定して居り早く繰絲してしまへば遊んで居り不熟の繰絲工ば一日かゝりて八盆を繰絲し終るのである。繰絲を終はりたるものは繰絲工場內に止まりてボンヤリして遊んで居る。夫故に繰絲工場は實に亂雜である。

かくして得られたる柞蠶絲は一〇〇斤を一梱として販賣して居るのである。尚ほ繰絲は板上繰絲法により方法の不完全の爲めに一〇〇斤の絲に對して八〇斤の挽手（屑絲）を生ずるのである。而して此挽手は紡績に使用せらるゝのである。

製絲工場の支出入の概要を擧げると次の樣である。

柞蠶絲一〇〇斤（一梱）を生産する場合

支出　五九七圓四〇錢	
内譯	
原料繭　一七〇、〇〇〇粒	四三五〇〇
食料、人夫賃	一三〇、〇〇
機關損料	三、〇〇
工賃一把	二、〇〇
家賃	六、〇〇
石炭代	一二、〇〇
招人金絲價ノ四分（絲價六〇〇圓）	二、四〇
藥品代	一三、〇〇
商損	五、〇〇
食料人夫賃石油	一三〇、〇〇
小計	五九七、四〇
收入　七一二圓八〇錢	
内譯	
柞蠶絲賣却一梱（百斤）	六〇〇、〇〇
挽手　八八斤	一〇五、六〇
蛹　三〇〇斤に付	七、二〇
小計	七一二、八〇
差引利益金	一一五、四〇

（ハ）柞蠶對策と滿洲柞蠶會社

滿洲國の他の産業が大なる計畫を以て發展せらるゝと同時に柞蠶業に於ては滿洲の農家に取りては、經濟上重要なる地位を占むるのみならず國際貿易上に於ても重要なる地位を占めて居る故に之が奬勵は緊要なるを以て、柞蠶の増産計畫が樹立せられ而して滿洲柞蠶會社が設立せられて買入、販賣及輸出等を一元的に行ふ樣にせられたのである。増産計畫の要項を擧ぐれば次の通りである。

(1)三〇〇億粒の繭を生産する目標を以て増産を計ること

A、蠶場適地の調査、休閑柞蠶林を利用すること、及未開柞樹林を開發すること

B、無毒蠶場を設置し、種繭の系統的増殖、改善を圖ると共に種繭檢査を勵行すること

C、品種改良、柞樹、柞蠶繭及副産物の加工の研究、柞蠶技術員の養成

(2)柞蠶を原料とする新織維工業の振興を圖ること

(3)柞蠶製絲業に對しては技術的指導並に助成を行ひ之が經營の合理化を圖ること

(4)柞蠶繭、柞蠶絲、柞蠶綿及挽手の買入、販賣並に輸出は滿洲柞蠶株式會社をして一元的に取扱はしむること

（二）滿洲の他纎維工業

前章に於ては主として柞蠶業に就きて叙述したのであるが、其他の纎維工業に就き其概要を記せば次の通りである。

（イ）羊毛

緬羊は約二〇〇万頭とせらる、緬羊は産業部所管の畜産司、緬羊改良場及大陸科學院所管の馬疫研究所、獸疫研究所及公主嶺農事試驗場に於て管理及研究せられて居るのである。公主嶺に於て見學したる蒙古在來種と「メリノー」及「コリデール」種との交配による産毛量に就きて記せば次の通りである。

品種	一頭一ケ年收毛量
蒙古在來種	一、四キロ
メリノー	六、一
蒙古在來種・メリノー種　交配F1	三、二五
蒙古在來種・メリノー種　交配F2	四、九
コリデール種	五、八
蒙古在來種・コリデール種　交配F1	二、八
蒙古在來種・コリデール種　交配F2	四、一

以上の實績の如く蒙古在來種は羊毛の生産量はメリノー及コリデール兩種に比すると著しく少量にして、羊毛の品質も優良ならざるのであるが蒙古人種の食料となれる其肉は頗る美味である。尚ほ蒙古人は其皮も亦必需品である爲めに蒙古在來種の改良は急速には行ふことは出來ないのである。

尚ほ奉天市鐵西に在る滿蒙毛織株式會社に於て紡績せられ居るのである。

（ロ）纎維作物

滿洲の纎維作物としては「ケナフ」（洋麻）青麻（イチビ）、大麻（纎維を目的とする時は線麻と云ふ）亞麻等がある。

ケナフ（洋麻）は大麻に似て其品質も優良である。今日尚ほ多量に生産せらるゝに到らないのである。

青麻及大麻等は其産額尚ほ多からざるなり。大麻は東洋精麻加工株式會社に於て吉林省哈達灣に第一期工場を開始す。

亞麻は公主嶺農事試驗場に於て古くより試驗が行はれたのである。然し滿洲國創立せられ國內の治安が安定するに及びて其栽培が俄に盛になつたのである。昭和九年春滿日亞麻股份有限公司創立せられ亞麻の耕作を奬勵し北滿に於て其耕作面積纎維用及採種用併せて千九百餘町歩たりしが昭和十一年（康德三年）には纎維用のみで一躍一万町歩に達するに到つたのである。紡績は奉天に於ける滿洲亞麻株式會社に於て行はれて居る。

（三）農産物

滿洲の耕地は總面積の三七、三%に當り、其總人口の八四、七%が農民である是等の事柄より見るも滿洲は農業國であつて農業が如何に重要であるか考へらるゝのである。

滿洲に於ける主要農産物に就きて其大要を述ぶれば次の樣である。

大豆―産額四〇〇萬噸にして世界の産額の六割に達し其八〇%は輸出せらる。

高粱―産額四〇〇萬噸にして主として食料とせらる、尚ほ高粱酒原料とせられ尚ほ其稈は建築材、燃料及アムペラ等に使用せらる。

粟―産額三〇〇萬噸にして其二〇―二二%は朝鮮に輸出す粟は奉天吉林、濱江の各省を主として生産せらるゝせらるゝものであつて滿洲人の常用食物である。

玉蜀黍―奉天、安東等が主産地である年産二〇〇萬噸に達す。

小麥―北滿地方が主體である南滿の大豆と相並んで市場作物の首位を占め大に重要なるものとされて居る。年産額は一〇〇萬噸である。

水稻―朝鮮農民によりて間島省を中心とした地方及び安奉線、渾河、遼河沿岸に栽培されて居る。

棉花―遼中、海城を中心とする南部地方の一帶及洮南を中心とする諸縣に於て生産せらる。

五ケ年計畫による増産計畫の完了後は實棉收獲高二億五千萬斤を突破するものありと想像せられて居る。

滿洲に於ける農業の開發を催し農業者の福利増進を圖り、尚ほ生産品の配給を圓滑ならしむる爲めに農事合作社あり。其事業として農産物の檢査、貯藏、運搬調製、加工及販賣、農業倉庫の經營、農産物交易場の經營、必要品の購入、配給貯金の受入及資金の融通等非常に廣汎に亘つて居るのである。從來國家的恩惠が薄かりし農村に秩序ある金融と事業とを與へて居るのである。合作社の構成員たる合作社員は只農業者のみならず、林業、牧畜業、漁業、地主或は農村依存地方の中小商工業者をも含んで居る。

康德六年七月末に於ける農事合作社數は百五十三社で殆んど同數の實行合作社を持ち合作員は二萬人以上に達して居る。

（四）鑛産物

滿洲國は約四十種の鑛物を産す其中三十二種は資源の保全又は國防上より見て一般私人の無統制なる採掘ば許されないのである、次ぎに其主要なるものに就きて敍述する。

◉石炭―全滿洲到る處に發見せらる。然して其埋藏量は二五〇億噸とせらる確實なる炭鑛區として設定せられたるもの三四七あり其中現在稼行中の炭山は百數十に達して居る。次に主要なる炭山を擧ぐ。

鶴岡（五十億噸）阜新（四十億噸）札賚諾爾（三十九億八千萬噸）密山（十三億七千萬噸）舒蘭（四億七千八百萬噸）間島（四億四千萬噸）三姓（三億三千四百萬噸）西安（二億七千萬噸）北票（二億三百噸）田師付（一億六千七百萬噸）八道溝（二千八百九十萬噸）東寧（二千百五十萬噸）

◉鐵鑛―鐵の埋藏量は二十七億噸以上と推定せられて居る、鑛區約八十あり。大鞍山と朝鮮茂山とを結ぶ線上の老嶺、大粟子、寬甸、本溪湖、弓張嶺、鞍山の各地を初めとし、鐵嶺、開原、或は許家屯

等の各地に亘つて居る。然して從來は滿洲の鐵鑛は貧鑛のみであつたが開原、弓張嶺、大粟子、許家屯等は何れも六〇％以上の量位を有して居る。最近通化省に於ても非常に良質なる鐵鑛發見せられ一大製鐵場が建設せられつゝあり。

此の如く滿洲に於ては製鐵盛になり多量の鐵を生産するに到れるを以て將來日滿の鐵需要量は完全に滿洲の鐵鑛を以て間に合ふと云はれて居る。

◎銅鑛—滿洲國内に於ける銅の資源は皆無とされて居つたのであるが、最近發見されたる鑛區は既に十二に達し其中八ケ所は已に開發に着手されて居る。新鑛區の埋藏量は未だ明かならざるも大體八—一〇％の含有量を有し　萬寶蓋子（寬甸縣）の如きは二〇％の富鑛である

◎鉛鑛—鉛は日滿を通じて約九〇％を海外より輸入されて居つた狀態でありしが楊家枝子（錦西縣、推定鑛量二一〇萬瓲）青城子（鳳城縣、推定鑛量一六〇萬瓲）の二大鑛山の開發を見更に輯安縣羽子溝鉛山も亦開發せられん。

◎アルミニューム—最近滿洲に於て無盡藏と云はれる礬土頁岩を原料として製出することに成功した。而して滿洲輕金屬會社生産にかゝるアルミニュームは陸軍航空技術研究所に於けるアルミニューム地金審査試驗に合格し海外アルミナを原料とするものに比して凡ゆる點が優秀なることを證明せられ多大の期待を持たるゝに至つた。

◎金鑛—滿洲國に於ける金鑛の分布は大興安嶺西部地方、大興安嶺北部の漠河地方、黑龍江沿岸の黑河鴎浦地方、松花江流域地方、間島地方、東邊道地方、熱河地方の各方面に亘り其埋藏量は六〇億圓と推定されて居る。從來は始んど砂金を中心としたものであつたが、山金方面にも極めて有望なるもの多く發展が期待されて居る。

◎石油—滿洲に於ては石油は望みなしとせられて居りしが、近年卓新に於て試掘せられて居りしが最近非常に有望なることを發見せられ、從來三百萬の豫算を以て研究に從事して居りしが是れを五百萬圓に增額して更に急激に研究を進むることとなりしと傳へらる。

（五）工業概要

滿洲國に於ける工業は最近非常なる發展を遂げつゝあり、次に其重要なるものに就きて敍述す。

◎製鐵業—昭和製鋼所は中樞的地位にあり、同社を中心として滿洲住友鋼管、鞍山鋼材、日滿鋼管、滿洲鑄鋼、滿洲ロール滿洲亞鉛鑛、井口洋行、滿洲久保田鑄鋼管等があり、强力なる鐵鋼生産プロックを形成して居る。

本溪湖煤鐵公司は資本金を一躍一億圓となし目下年産五〇萬瓲生産計畫を樹立しつゝあり。東邊道開發株式會社は將來完成の曉には鐵鋼の生産高六十萬瓲を突破するものと期待されて居る。

◎機械器具工業—各種の機械器具工業も諸事業の勃興に伴はれて非常なる發展を遂げて居る。其主なるものは次の通りである。

奉天造兵所は兵器製造の確立を目的として居る。滿洲機器、大連機械製作、滿洲工廠等は何れも汽機、汽罐及燃器、電氣機械等の部門を分擔して居る。

同和自動車滿洲飛行機製造及滿洲計器の三社は特種會社にて夫々製造に當つて居る。滿洲車輛及滿洲工作機械等の會社も近く創立せらるゝなり。

◎化學工業—新興企業として目覺しい發展を示したのである。其主なるものは次の通りである。

滿洲化學工業、滿洲石油の原油精料撫順炭鑛製油工場の頁岩油工業並に石炭液化滿洲合成燃料及滿洲油化工業の液體燃料製造等である。

◎紡績工業—滿洲に於ける綿紡績工業は大正十二年頃より勃興したのであるが其業績は滿洲事變迄は概して振はなかつたのである。主なる工場は滿洲紡績、奉天紡沙廠、滿洲福紡、內外綿並に營口紡等である。全紡織錘數は二十三萬六千餘に達して居る。

◎パルプ工業—滿洲國政府に於てはパルプ工業の急速なる發展と森林開發に資する爲め昭和十一年に滿洲パルプ（製紙）日滿パルプ（人絹）東洋パルプ（人絹）東滿洲人絹パルプ（人絹）の四社の設立を許可した。在來の鴨綠江製紙を加へて五工場あり、生産能力は製紙用パルプ三萬瓲、人絹パルプ四萬五千瓲となる豫定である。

此外草パルプ、豆稈パルプも計畫せられつゝあり。

◎輕金屬工業—滿洲に於てはアルミニウムの原鑛石が豊富に埋藏せられ且つアルミニウムの精錬に必要なる諸材料は、全部滿洲に於て安價に且つ容易に得らるゝのである。滿洲輕金屬製造會社は其開發を目的として創立せられたのである。

目下第三期增産計畫期にあるのである。

◎電氣工業—電氣事業は日露戰爭後企業化し種々なる段階を經たのであるが、現今に於ては全滿洲電氣事業は擧げて滿洲電業會社に包含せられ躍進時代に入つて居る。又水力による發電事業も國營の下に其建設が急がれ第一期として松花江、鴨綠江及び鏡泊湖が近年完成せらるゝ豫定となつて居る。

（六）大醫科學院

國力の進展の爲には科學的研究の必要なるのは言を待たざる所である。滿洲國に於ては特に是れを認め壯大にして整備せる科學研究所を設立し、恩師鈴木梅太郎博士を以て院長となし各種方面の研究者を網羅し貴重なる研究が進められて居る其重要なる部門は次の如し。

有機、無機及應用化學、農藝化學、森林化學あり。尙ほ此外獸疫研究、動植物學研究（哈爾濱博物館中）土木、建築材料研究、地質研究等が行はれて居た。

更に中間工業試驗として各種の工場あり即ち罌粟油の製造、罌粟の種子の殼より（モルフイン）の製造、ヴニア板製造、硝子器具の製造工場、サンガン酒の製造アスファルト改良に關する研究及製造、滿洲に於けるアルカリ地の土地改良に關する研究等が行はれて居る。

（七）奉天同善堂

◎創立者の略歷と人格

同善堂、奉天にある有名なる慈善病院である、滿洲にも此の如き立派なる人物が居つたと謂ふことを示す爲めに玆に記すこととする。

本堂の創始者は左寶貴氏である、同氏は山東省の人で字は冠廷と稱す、幼にして父母を喪ふ。清の咸豐初年寶賢、寶清兩弟と共に湖南省司令曾國荃の居軍に入り楊子江南北の討匪に功を著はす。後河北、直隸の匪賊を討伐し功を以て參課兼副將に擢でらる、其後鴨綠江の匪賊宋三好を檎にし其他多數の軍功により、統領奉軍參謀長に任命せらる、次で高州鎭總兵に補せられ後尙奉天に留り練軍講武の傍ら城廓を補修防備を整へ以て治安を確保し、道路を開き交通の利便を圖り、更に教育の振興を整ひ營口海神廟及瀋陽軍公所、南北寺等に大小義務學校を創設し餘暇親しく學舍を訪れ、循々として課程を尋ねて倦まず、誠に儒士の風格を有し斯く內政を整備すると同時に社會公共の救濟事業に心を盡し施粥廠を設けて天災事變の罹災者並に貧民救恤に孜々怠ることころなし。

光緒七年現在の本堂構內に天然痘豫防疫製造所、育嬰所、養老所を開設し省內天然痘豫防、育兒保護、難民救濟に努力し尙教育、交通、產業の開發其の他宗教に意を用ひ寺院、社祠を建立し民心の教化に努めたり。

光緒十七年朝陽建昌の白蓮教と稱する宗教團匪十餘万蒙古庶民を慘殺掠奪を擅にす。左公軍を督し進擊するや數晝夜にして團匪を潰滅せしむ、而して捕はれたる婦女數千名に對して資を給し保護送還す此處に於て朝陽建昌の治安復活其功により勳位並に禮服の恩賞を忝ふす。光緒二十年皇太后萬壽七旬に當り更に雙眼花翎の勳章を賜はり、東三省步騎營の總統となる。

同年五月朝鮮事變起る、左公奉軍を率ひ朝鮮に出陣すべき詔命あり玆に於て軍を督し平壤に進擊せり。日軍迫るに到り他軍統將再三後退を勸誘せられしが左公之れを退け八月十三日拂曉手兵を率ゐて自ら臨山北礮臺に督戰す。左右挾擊を受け砲聲耳を聾し烟彈漲るの激戰三晝夜彈藥將に盡きて援兵既に空し、此時提督葉志超亦部將と共に孤軍重圍に陷り、日本軍總攻擊の前夜即ち十四日諸將軍會議を開き葉氏提議して曰く、事既に爰處に至る手兵を殺さんより一坦城を棄て退却し功を後日に圖るに若かずと、諸將言ふ者なし。左公獨り憤然として之を排し今吾大軍を擁して此の天險地を扼す、戰未だ半ばにして退却せんとは爰ぞや若し戰ひ利あらざらんか只一死あるのみ、葉再び答ふる能はず。葉に代つて提督指揮官たるの實權を握り死を決して皇帝恩賜の戒名に身を正し手兵を提げて自ら軍の先頭に白馬を進め一氣に日軍の右翼陣地を拔くべく勇猛反擊彈丸盡きては刀を振ひ奮鬪力戰是れ努めたるも武運つたなく、遂に咽喉に砲彈を受け六十一歲にして七星門の戰場に忠烈なる戰死を遂ぐ。日本帝國大日館主管兼平安道地方司令官陸軍大佐水野勝毅氏之を稱へ左公古戰場七星門外に三千年來燦たる東洋に流るゝ誠忠武士の龜鑑として左寶貴統領の表忠碑建てゝ碑面に

勇冠三軍忠顯千古
明治三十七年九月十五日戰死
日本陸軍大佐　水野勝毅建之

と記す。

朝廷を始め萬民左公の英靈忠體異域に偷むを哭悼し太子少保（爵位）の恩賜あり。左公性忠孝幼時父母を失ひて孝養盡すを得ざりしを嘆じ、軍中と雖も父母の命日に遇ふや潔齋恭謹祭事を篤ふす、其哀情十年一日の如し。

母校ニュース

春蠶繭生産額　春蠶期に於ける養蠶科三年生の原蠶飼育を除き、二年生の絲繭用養蠶實習は生徒三三名、一人當蟻量三瓦計九九瓦を掃立て全收繭量四〇三瓩九二五瓦中上繭三七六瓩六〇〇瓦の成果を擧げた。一瓦當收繭量は四瓩一〇七瓦であつた。指導教育は佐藤春太郎教授、瀧澤、松田、小泉の三副手で、品種は歐一八×支一〇七歐、一六×支一六、改良鐘白×改良新白、分離白一號×滿である。

中島俊秋氏來任　東京文理大副手として菅平高原生物研究所に勤務の中島俊秋氏（蠶二五）母校の昆蟲實地指導を囑託され、母校昆蟲學教室に兼務されることとなつた。

倉澤恒夫氏新任　神奈川縣蠶業試驗場に在勤中の倉澤恒夫氏（蠶二一）は家庭の事情にて同場を退職、郷里上田に歸られ六月一日より繊維化學科副手を勤められることとなつた。

清水傳氏新任　入營から應召と四年餘りの間兵役に在つた清水傳氏（蠶二三）は最近無事歸還され、母校副手として六月十日より養蠶科圃場部に勤務されることとなつた。

伊勢神宮遙拜　六月十日　天皇陛下に於かせられて午前十一時十二分外宮、午後一時五十四分內宮に御親拜あらせられるに當り、母校でも同時刻サイレンを合圖に授業或は實習中各自在所に於て同神宮方向に向ひ遙拜した。

東京高蠶生來訪　東京高等蠶絲學校養蠶科二年生五〇名は木暮教授に引率され長野縣蠶種關係施設見學旅行の途次六月十七日母校を訪問され先づ母校養蠶科二年生主催の千曲會館に於ける歡迎會に臨みなごやかな交歡をなしたる後、校內を見學一巡して午後二時半藤本蠶種會社に向つた。歡迎會には遠藤教務課長、佐藤養蠶科長を始め養蠶科の諸先生が出席された。

第一回校內除草清掃　炎天續きではあつたが校庭には相當雜草が生えたので六月十三、四日の兩日午後一時より二時間職員、生徒、傭員を區分して校庭の除草石炭穀運搬整地等をなした。

商工會講所の劃學生座談會　平素當上田市發展策を講じてゐる市商工會議所では其の始めての試みとして、母校學生課に申込みあり六月十五日午後二時より二時間餘に亘り母校修己寮一年生と座談會を催し、四月入學して始めて上田を訪れた第一印象及び其他學生の眼から見た改善要點等を聽取した。

櫪原神宮奉納劍道大會に部員出場　六月十六日全國大學高等專門學校學生生徒に依る櫪原神宮奉納劍道大會に母校劍道部より宮下豐次（蠶一）二段、福田英彥（蠶二）二段、松田得治（蠶三）三段の三選手を派遣したが、一回戰は不戰勝、二回戰に於て立教大學と對戰二對一で殘念乍ら退いた。

秩父宮殿下詔書御捧讀拜聽式　六月十六日櫪原神宮に於て銃後祈誓式の行はれると同時刻に母校に於ては十一時十分全校職員生徒傭人一同講堂に集合し國歌合唱、同神宮遙拜、殉國英靈に默禱を捧げたる後、十一時三十七分ラヂオ放送を待つて神宮式場に於ける秩父宮殿下紀元二千六百年紀元節に賜はりたる詔書の御奉讀を拜聽し銃後精神を强固にした。

學生喫煙場所指定　母校では銃後學生喫煙自肅と校內に於ける火災防止の立前から六月二十日校內に於ける學生喫煙場所を學生課から左記の如く指定し其場所以外は絶對に之を禁じた。勿論職員も各職員控室及該指定場所以外は許されない譯である。

即ち生徒控室、蠶室內生徒休憩室、（實習中）第二製絲工場西隣室（實習中）紡織工場南側池の端、同修繕工場、繊維化學科小使室　以上

勤勞報國隊中支班派遣生決定　昨年より文部省の指令に依り派遣する樣になつた興亞勤勞報國學生隊に今年は新たに中支班が加へられ、之に母校學生福田英彥（蠶二）鈴木敏夫（絲二）赤瀨悊（紡二）の三名が派遣されることに六月二十日決定七月二十日頃出發の豫定である。

製絲科一年生の見學　一學期の授業を終へて乾繭實習續いて養蠶實習に入る製絲科一年生三五名は六月二十二日滿澤講師に引率されて市內常田館製絲所、篠之井檢定所、坂城繭市場を見學した、繭檢定所に於ては所長依田寛之助殿より五〇分に亘る繭檢定に關する講話を聞いた。

一年生臨時試驗　一年生の第一學期試驗は夫々左の通り行はれた。

養蠶科　六月廿四――廿六日
製絲科　六月廿一日
繊維化學科　七月十一――十三日

菅平に集團作業　第三回目の本年度集團勤勞作業は左記の日程及び人員にて菅平三日城スロープ西方に當る國有林の口徑十乃至十五糎の落葉松一二六一一本の間伐を完成した。宿舍は菅平文部省高原體育研究所で午前六時起床から午後九時就床迄、國旗揭揚、國歌奉唱、宮城遙拜ラヂオ體操、朝食、作業場出發、宿舍到着、入浴、夕食等一切時間的に規律ある生活をなし、清淨な空氣の中に高原の雄大さと森林の崇嚴さを味ひ、充分な心身鍛練をなした。作業は各組共初日正午より午後三時半迄、終日午前九時半より十一時半であつた。

第一組期日自六月廿四日至同廿六日
人員　紡二　卅一名　繊化一　卅八名
職員は古谷教授、行元教授、志賀助教授、小林助教授、宮原雇
の計七十四名

第二組期日自六月廿七日至同廿九日
人員　蠶一　卅九名　紡一　卅九名
職員は校長、目崎教授、志賀助教授の計七十一名

蠶二生徒長野松本有明見學　養蠶實習を終つた養蠶科二年生は六月二十七日山口助教授小泉副手引率の下に長野市に赴き、縣農事試驗場、縣蠶業試驗場、測候所、NK放送局を見學、一旦歸校して乾繭實習を行ひ七月一日には山口助教授、校天柞蠶飼育林を見學、續いて松本市の松田副手引率の下に南安曇郡有明村の母片倉一代交配種普及圖、片倉蠶業試驗所を見て淺間溫泉小柳の湯に宿泊、翌二日は市內繭檢定所、工業試驗場、農林省蠶絲試驗場松本支場、片倉松本製絲所を見學解散、校外實習に入つた。尙小柳の湯宿泊の晩は市內同窓各位が參集して歡迎會を催され、又倉澤教授には東京から態々有明飼育林の案內及說明に來られ、引卒者並に生徒は非常に感謝感激してゐた

柔道部意氣軒昂　東京工業大學主催の全國高工柔道大會に華々しく優勝を完成した母校柔道部は七月十二日より開かれる今年度同大會に再度の制覇を期し六月廿九日より必勝の意氣に燃えて合宿練習を開始した。

清水書記榮轉　大正十一年十月上田蠶種株式會社より母校會計課雇として赴任昭和七年四月書記に任官、爾來誠實熱心に勤務會計事務に手腕を揮はれた清水運策氏は今回新たに官立となつた香川縣粟島商船學校會計課長に榮轉されることとなつた。同氏の去られるは母校として痛手ではあるが今後の華々しい御發展を祈る次第である。尙同氏の達筆は衆知のこと、圖碁、寫眞にも相當の腕前を持つて居られたが此の方面の御發展も蔭ながら願ふ次第である。

細川講師助教授に昇進　母校繊維化學科講師細川豐氏（蠶一九）は七月一日付を以て助教授に任ぜられた。同氏は當上田市の出身で昭和三年上田中學を卒業昭和七年母校養蠶科を卒べ直ちに副手として當時蠶絲化學教室に勤務、現校長井上教授の下に指導を受け昭和九年講師に昇格して現在に至つたもので當年三十歳の新進學徒である。御祝を申上ぐると共に益々御發展を祈る次第である。

宮原大正治氏書記に昇進　大正十五年四月より給仕として母校會計課に入つて以來非常に實直に勤め昭和九年一月雇に昇格して學生課に移つて誠實熱心に執務されてゐた宮原大正治氏は七月一日付母校書記に任官し再び會計課に執務されることとなつた。當年廿八歳の新進氣鋭の士である御祝を申上ぐると共に今後益々御精勵御發展の程を願ふ次第である。

養蠶科三年生卒業論文製作實習　例年養蠶科三年生は夏蠶期に於て各自の卒業論文題目に應じて其の關係教官の教室に分れて實習實驗に從事する事になつてゐたが本年も春蠶飼育、採種實習を終了して夫々各教室に於て各自テーマに基く實驗實習調査に就いた。テーマによつては已に一ヶ月餘前から開始してゐるものもある。

製絲科一年養蠶實習　製絲科一年生三五名は七月一日より佐藤春太郎教授、小泉副手、市原臨時副手指導の下に夏蠶飼育實習に入つた。掃立廿三日品種は日一一五×支一〇八、日一一五×支一〇九の二品種で掃立蟻量は一人當一・五瓦計五二・五瓦である。

三科二年生の校外實習　養蠶製絲紡織三科の二年生は夫々六月中下旬に授業或は校內實習を終了して養蠶科生は大體七月十日頃より三十五日間各蠶業試驗場、會社の蠶種部等へ、製絲科生は六月二十日より一ヶ月間各繭檢定所、製絲工場等へ、絹紡織科生は七月一日より一ヶ月間各紡績會社へ行つて校外實習を體驗することとなつた。

八ケ岳の集團勤勞作業講習會へ　各高等專門學校に於ける集團勤勞作業の生徒指導者養成の目的を以つて文部省では今年新たに七月十三日より一週間長野縣八ケ岳修練農場に於て高專生徒集團勤勞作業講習會を開催する。母校では之に蠶二犬久保孝一、片山文一、絲二小林武志、紡二坂根宗太郎の四君を派遣する今後の集團作業の意義ある能率に効果が期待される。

蠶二生徒蠶種製造見學　春蠶實習中の養蠶科二年生は二班に分れて第一班は五月三十日佐藤春太郎教授、松田副手に引卒され、第二班は翌卅一日瀧澤、小泉兩副手に引卒されて長野縣蠶業試驗場上田支場及び塩尻村の藤本蠶業株式會社の蠶種製造業態を見學した。

養蠶科三年生採種實習　春蠶の原蠶飼育に續いて養蠶科三年生は六月二十四日から七月十日迄蠶種製造實習を行ひ上々の成績で終了した。蠶品種は國蠶絲原種同交雜種特殊品種の系統維持等である。

再び今春卒業生に告ぐ

昨秋實施せる第一回體力格定に於ける各級合格者に厚生省より體力章を下附され當課に到着候故、未だ送附方御申出なき方は至急現住所記入の封筒を當課宛差出し御申請相成度候

七月一日

學生課

御挨拶

謹啓　時下酷暑の砌愈々御清祥の段奉慶賀候
陳者私儀上田蠶絲專門學校在職中は公私共格別の御懇情を忝うし洵に難有奉深謝候此度不圖も粟島商船學校へ轉任被命候に就ては今後共一層の御指導御鞭撻を賜はり度奉懇願候
右不取敢御禮旁々御挨拶申上度如斯御座候　敬具
昭和十五年七月一日

清水運策

香川縣三豊郡粟島村

二伸　私の趣味に多年滿足をお與へ被下候同級生雜誌「圍爐裡」「ぽまん」「煖爐」「逆鱗」「桑の株」「炬燵」「一七會雜誌」「たきび」「こだま」「噴煙」「たがね」「芙蓉」「双美」「三光」「自由」「尙志」等の各位に深甚の謝意を表し尙今後の御後援を願上候

本會記事

本會日誌

六月七日　野口理事、猪坂直一、兩氏を煩はし滿支視察座談會開催す
六月十一日　中岡園（絲十二）逝去せらる電報にて弔意を表す
六月二十二日　大手町一帶の火災に際し蠶絲局長宛近火見舞の電報發信す
七月二日　夏季校外實習生派遣に付關係支會長に依賴狀發信す
七月五日　時報發行日臨時變更屆提出す

針塚長太郎先生謝恩記念資金受領報告（第廿五回）（七月五日現在）

金九圓也　山内　龍一
累計金壹萬〇五百四拾五圓也

内田先生記念品贈呈資金追加分

金參圓也　矢島　文男

會費領收（七月五日現在）

昭和十五年度會費金四圓也

今井　又藏（蠶一）
小山　庸人（蠶一）
小林　庸（蠶三）
松谷鑛之助（蠶三）
四方　定雄（蠶九）
鈴木　泰市（蠶十三）
宮城　博（蠶十三）
前澤　康雄（蠶十四）
兒玉　信幹（蠶十五）
小山　惠治（蠶十五）
山下　忠雄（蠶十五）
井澤　喜三（蠶十六）
熊谷　恒次（蠶十六）
折茂正太郎（蠶一）
坂田　榮雄（蠶二）
中澤　勝也（蠶三）
栗原　章（蠶五）
荻原　幸胤（蠶一〇）
原　茂（蠶十三）
竹内　孝三（蠶十四）
池田　善三（蠶十五）
小林　重男（蠶十五）
西本　朝平（蠶十五）
山本　誠（蠶十五）
今井　和人（蠶十六）
桑原與四右衞門（蠶十六）
友野　正路（蠶十六）
橋本　博（蠶十七）
尾崎　利雄（蠶十八）
村田　一由（蠶十八）
山本　卯一（蠶十八）
岡　卓郎（蠶十九）
茅野　功（蠶十九）
町田　史郎（蠶二十）
石原滿洲夫（蠶二一）
小林　輝夫（蠶廿一）
水谷　清（蠶廿一）
瀧澤　幸（蠶廿二）
西川　晋（蠶廿三）
吉田　信伍（蠶廿三）
桂　元三（蠶廿四）
戸塚　一（蠶廿四）
藤本衞佐雄（蠶十六）
岩下　龍哉（蠶十八）
坂口　正信（蠶十八）
山本　賢市（蠶十八）
六川忠一郎（蠶十八）
加藤　省三（蠶十九）
齋藤　章（蠶二十）
宮川千三郎（蠶二十）
上村　賢造（蠶廿一）
西澤　良一（蠶廿一）
坂口　育三（蠶廿二）
關　熈（蠶廿二）
横澤　正雄（蠶廿三）
秋山　利夫（蠶廿四）
鈴木　俊夫（蠶廿四）
横内　一郎（蠶廿四）
中村　繁（蠶廿五）
若林　康弘（蠶廿五）
有間　正久（蠶廿六）
清水　英人（蠶廿六）
遠藤　文平（絲一）
鈴木　誠一（絲一）
酒井五十三（絲二）
伊藤　清（絲五）
友重　誠三（絲五）
恒川　芳保（絲十）
林　十郎（絲十一）
太田　正治（絲十二）
櫻井　皐三（絲十二）
相澤　仲司（絲十三）
兒玉　來（絲十三）
手塚　政吾（絲十三）
頼本　啓一（絲十四）
角替　赳夫（絲十五）
櫻井　洸（絲十六）
隅倉　美義（絲十七）
宮野　保夫（絲十七）
秋山武一郎（絲十九）
小口　伊祐（絲十九）
中島　熊保（絲十九）
林　秀門（絲十九）
大井　正夫（絲二十）
川村　五郎（絲二十）
長谷川恒三（絲二十）
山本金之助（絲二十）
岩本　賢次（絲廿一）
北澤　常雄（絲廿一）
今村　覺治（絲廿二）
久保井左武郎（絲廿三）
鈴木　武夫（絲廿三）
桑木　正義（絲廿三）
吉川　啓人（絲廿五）
佐藤　俊郎（絲廿六）
野口新太郎（紡二）
香山　清和（紡三）
櫻井　隆夫（紡四）
岡崎　喜熊（紡五）
本田　圭吉（紡六）
坂本　政雄（紡七）
橋本辰次郎（紡七）
坂　求（紡九）
佐藤　一郎（紡十三）
木下　重政（紡十四）
岩崎　正典（紡十六）
柳澤　六平（紡十六）
下田　統夫（紡十六）
矢野　進（蠶廿五）
有川　博（蠶廿六）
北原　幸治（蠶廿六）
山田　次男（蠶廿六）
小林　茂樹（絲一）
大箸　政平（絲二）
父母　仙藏（絲四）
井上　一郎（絲五）
大塚　重藏（絲八）
若林新一郎（絲十）
岩田　正（絲十二）
緒方　良純（絲十二）
福島鋼次郎（絲十二）
彼末　武猪（絲十三）
高橋　誠（絲十三）
南林　孝三（絲十三）
笠原　豊（絲十五）
栗野愼一郎（絲十六）
星野　拓弘（絲十六）
宮崎　弘（絲十七）
山崎　通雄（絲十七）
大木　定雄（絲十九）
小澤　正一（絲十九）
林　清市（絲十九）
宮原　秀人（絲十九）
荻原　行雄（絲二十）
竹内　正司（絲二十）
三宅　勳（絲二十）
矢島　文男（絲二十）
太田　三郎（絲廿一）
白井　四良（絲廿一）
尾澤　敏男（絲廿二）
岩田久太夫（絲廿三）
上條　之有（絲廿三）
平澤和司男（絲廿四）
井上　正人（絲廿六）
中島　藤治（絲廿六）
服部　虎雄（紡二）
宮本　靜雄（紡三）
三宅　玉留（紡四）
廣瀬　廣（紡六）
江野村一雄（紡七）
椎屋　藤良（紡七）
山内　龍一（紡七）
小林忠十郎（紡十）
唐澤　正（紡十三）
藤松　利八（紡十五）
諸岡　市郎（紡十六）
柳澤　柳二（紡十七）

昭和十四年度會納金四圓也

小山　庸人（蠶一）
岩瀬　義夫（蠶八）
北原　喜昌（蠶十七）
中西　全（蠶廿五）
田中　三郎（絲一）
服部彌一郎（絲二十）
古田　力（絲廿四）
唐澤　正（紡十三）
佐谷戸健次郎（蠶一）
緒方善之助（蠶八）
山岸　恒一（蠶廿二）
荻原　和夫（蠶廿六）
高橋　伊作（絲十四）
田ノ岡　實（絲廿二）
手塚　勇（紡十三）

未納會費納入者

金四圓也（昭和十年度分）
奥田　達雄（蠶一）　尾見　祐八（蠶五）
（昭和十一年度分）
百瀬　正（蠶三）
（昭和十三年度分）
味知　康三（蠶七）　高橋　汜一（蠶八）
上杉慶次郎（蠶十八）　荒木　喬（蠶廿二）
宮坂　惣男（絲廿三）　淺山　茂樹（紡十七）
金貳圓也（大正十一年度分）
窪田　禎作（蠶七）
金拾六圓也（昭和九、一〇、一一、一三年度分）
唐澤　正（紡十三）

入會金納入者

完納者　佐藤　俊郎（絲廿六）
金拾圓也　吐師　聰（紡十九）
金六圓也　淺山　茂樹（紡十七）

終身會費完納者

窪田　禎作（蠶七）　大高　雄三（蠶九）
湯澤　重敬（絲九）

昭和十三年度準會費金八拾錢也

山岸　ひろ（敎一）　橋詰美智子（敎六）

昭和十四年度準會費

茨木　こう（舊敎）
坂場もとゑ（舊敎）
山岸　ひろ（敎一）
臼井　和子（敎三）
和田　りん（敎三）
木下きみ江（敎四）
柄澤たつを（敎六）
橋詰美智子（敎六）
山崎　傳（敎六）
山本　コウ（敎七）
伊藤　幸枝（舊敎）
高寺　種子（舊敎）
飯島　六（敎二）
山口　久子（敎三）
掛川　まづ（敎四）
平田　時江（敎四）
小林　玉枝（敎六）
柳澤　運子（敎六）
荒木　梅子（敎七）

昭和十五年度準會費

茨木　こう（舊敎）
坂場もとゑ（舊敎）
高橋　スズ（舊敎）
臼井　和子（敎三）
木下きみ江（敎四）
關　かほる（敎五）
小林　玉枝（敎六）
山崎　傳（敎六）
山本　コウ（敎七）
伊藤　幸枝（舊敎）
高寺　種子（舊敎）
飯島　六（敎二）
和田　りん（敎三）
掛川　まづ（敎四）
大瀧　廣子（敎六）
柳澤　運子（敎六）
荒木　梅子（敎七）
正村江津子（敎八）

昭和十六年度準會費

高橋　スズ（舊敎）　關　かほる（敎五）

准會費領收（女子學友會取扱分）

自昭和十二年至十五年四ヶ年分
金參圓貳拾錢也　吉崎　きよ

自昭和十四年至十七年四ヶ年分
金參圓貳拾錢也　赤沼　まさじ

昭和十四年十五年二ヶ年分
金壹圓六拾錢也　荻原さかゑ　黒澤壽喜子　塚原　とね

昭和十五年度
金八拾錢也　田中　寛　上原　一代　小林　〆代　片岡ゑな子

敍任辭令

現職員之部

任栗島商船學校書記　給四級俸　書記　清水　運策
任上田蠶絲專門學校助教授　給七級俸　副手兼講師　細川　豊
任上田蠶絲專門學校書記　給十級俸　雇　宮原大正治
（以上七月一日）
敍勳五等授瑞寶章（六月十日）　從五位勳六等　林　貞三
敍正七位（四月十五日）　大平　敏彦

卒業生之部

敍正七位（三月十五日）　從七位　中津信一郎
任陸軍步兵中尉　敍從七位（四月二十一日）　陸軍步兵少尉正八位　齋藤　修一
七級俸下賜（五月十三日）　朝鮮公立實業學校教諭、補滿州公立農業學校教諭　福谷朝太郎
七級俸當分千五百六拾圓下賜　公立實業學校教諭　梶田　廣貞
七級俸下賜以上（三月三十一日）　同　花岡　作彌
九級俸下賜（六月六日）　福島縣農林技師　地方農林技師ニ補ス　丸山　武夫
七級俸下賜（三月三十一日）　公立實業學校長　林　新一
公立實業學校教諭正八位　公立中學校教諭ニ任ス　高等官八等ヲ以テ待遇セラル　長野縣岩村田中學校教諭ニ補ス（六月十日）　吉田　隆雄
十一級俸下賜（五月二十九日）　地方農林技師　竹内　善吾
地方農林技師ニ任ス　高等官七等ヲ以テ待遇セラル　長野縣農林技師ニ補ス　小松　茂久
願ニ依リ本職ヲ免ス（以上六月二十日）　地方農林技師　小林　繁
同　十給俸下賜（六月十九日）　内田　訓之亮

本校辭令

昆虫實地指導ヲ囑託ス（五月廿日）　中島　俊秋
副手ヲ命ス　纖維化學科勤務ヲ命ス（五月卅一日）　倉澤　恒夫
臨時副手ヲ命ス　養蠶科勤務ヲ命ス（六月十日）　清水　傳
願ニ依リ副手ヲ免ス（六月十七日）　副手　瀧澤　七朗

御挨拶

謹啓　酷暑の候各位益々御多祥之段奉賀候
陳者私儀本校に職を奉じて以來十五年諸先生方並に皆樣方の御指導に依り大過無く勤め居り候處今回不圖書記を拜命致し學生課より會計課に轉じ候に就いては益々勉勵其職責を完ふせん覺悟に御座候間今後共一層の御援助御鞭撻の程御願申上候
右御挨拶迄如斯御座候　敬白
七月一日
會計課　宮原　大正治

農業藥品　化粧品
純良藥品　寫眞材料
三共農業藥品ウスプルン
東信代理店
上田市海野町
合資會社　河合商會
電話（海野町營業所）二七　八一五

御宴會に　御會食に
レストラン
香青軒
明朗な洋室　落付いた
和室（數室）
上田市袋町　電話13番

御來田のお土産は……
みすゞ飴　上・のフルーツ
晒水飴　栗羊羹
杏羊羹　黒羊羹
信濃そば　クルミ羊羹
米煎餅　果物類
罐詰
上田市松尾町
上・飯島商店
電話　長一二六〇
（販賣部）三五四

支會通信

御郷里豐秋村へ 針塚先生を迎へての會

群馬支部

紀元二千六百年の記念すべき季に吾々千曲會支會員は針塚前校長先生を迎へ、早速歡迎會をとは誰しも胸の中には有り乍ら其の機を得ず其のまゝとなつて居たりが、餘り延ばす事は上簇時期となり出席不能の人が多くなるとの意により幹事二三の人に電話で相談して早速針塚先生宅へ丁度前橋へ御出張の岡庭氏に御足勞願ひし處、上田方面へ御出掛けとの事に付上田へ電話で照會したら學校には御不在其の旨通ずるとの返事であつた。當日午後先生よりの電報に接し、大至急支部員に通知を出したのが三日の事だつた。五日午後六時が定刻よりやゝ遲れて開會し支部長は場長の關係公務で出席不能、庶務、會計課長の岡部社長は社用の爲「七時ハンユク」の電報が東京から來る。頭なしの開會だつたが橋本工場長代つて開會の辭『先生は本年七十歳だと思はるゝが十年前と全然變り無き御元氣』との挨拶に一同初めて先生の年を知つた樣な次第だつた。開會の辭の後で先生の御挨拶は『昨日畠の中打をやつたが能率は若い時代と變らないが、途中甚疲の必要を感ずる』と申されたが此れは無理はない事だ。仲々此の眞似は出來ない。先生の老いて益々旺んなるホルモンは矢張り斯樣な處から注入されて居るのだと一同感心した。場所は來々軒で支那料理三テーブル、殘念乍ら場所が狹いが前橋では全く選定に常に幹事は苦勞させられて居る狀態なので、此の點先生に早速御了解を得たら先生はイヤ〳〵結構だと申されヤレヤレの態だつた。先生は茶菓子を持參しなかつたので實は此れでと申され差出されたので此れは會計員として全く困るからと御辭退したが何うしても御納め願へないので都丸技師に御渡しして御返しを御依賴して會計員ホツトした有樣、微細の點まで良く氣の付く先生に敬服した。宴酣にして都丸技師の詩吟、手塚場長の謠曲、柴田氏の拍手「矢張り上田の會ではよく合ふ」と自己滿足全く愉快、岡庭氏の米國はニユーヨーク片田舍の視察旅行談を活辯にて紹介。一同爆笑、特に靑年層をトロリとさせた。其處へ全く遲れて社長入り。先生に謝意を表せられ方方より遲刻の責の盃が飛び來り。早くも社長一同と同じ水平線になつたが十八番は終りまで出なかつた樣な氣がするが小さい聲で辯ぜられたのかも知れん、若しそうだつたら平謝。橋本工場長、土屋氏根岸氏、小山氏、山口氏等の十八番が續いて出た、場所は狹いが盛會の裡に萬歳を三唱して十時に終り、自動車で先生をお送りした。

支會として未だかつてなき氷が水に溶け合つたとでも申すか本當に腹から笑ふ而も暖か味十二分にある會であつたと思ふ。日本人は矢張り洋食より支那食又は日本食で恩師を前にして飲み、且つ食ふは又となき滿足の事である。

會員諸君よ、當地方御出張の節は澁川驛より數町の先生宅へ是非御立寄になつて東方遙かに裾を引くあの雄大無比の赤城が吾々に敎へて居る大自然の威容と先生の矍鑠たる御姿に接し、御高說を拜聽せられ猶一層人間を磨かれん事を切に切に御奬めして止まざる次第である。

出席者御芳名（尊稱を略す）廿八名

岡部彌平　橋本景吉　石坂虎次郎
手塚芳太郎　石濱正已　土屋孝
大木定雄　山口悠紀男　吉越繁夫
濱井壽夫　加藤喜一郎　吉村眞作
田口博輔　都丸晴治　根岸丑之輔
田口富五郎　宇田虎一郎　大熊康代
林四郎　岡庭武治　中村繁
小林良亘　三宅玉留　田村朝之助
柴田久　町田壽男　茅野清三郎
小山清

御來滿の井上校長を圍んで

滿洲千曲會

昨年代議員會の後で、「是非滿洲千曲會員がお待ちしてゐます」「その中必ず行きます」と校長先生とお約束して置いた御來滿が實現して五月の二十二日から東京で專門學校長會議があると云ふ御多忙の中を都合されて三週間の御豫定で視察に來られると拜聞し、之を好機に奉天で新線端午の節句に臨時總會を開く事にしました。

この日來會者三十名の中には、先生と御同道の白澤さんの外に偶々社用で來滿中の唐澤正平さんや、熱河の奧から十五時間もかゝつて來奉された人、早朝通化を發つて來られたり、又岫巖の城から七時間の自動車と六時間の汽車に乘つてやつと宴會に間に合つた人、或は西豐の山奧から輕便鐵道で。夫々會員の久しぶりの對面でした。

朝から市內御見物中の先生を六時過奉ビル七階の宴會場にお招きし、元氣な眞田勞遣が不相變の御健顏を圍んで、あれやこれやの隨談に時を過しました。

× × ×

隨談（そのはなし）二、三ー

◎先年井上先生御來滿の折は在滿會員はホンの四、五名で湯川さんが安東から奉天、熊岳城へと御案內されたさうです。

◎湯川會長の挨拶の中
「昨年九月の在滿會員は六十一名でしたが現在は八十名に增加し今後は纖維科の新設によつて滿支各方面への發展は益々殖える事でせう」

◎先生は今迄にも滿鐵の囑託などされ此方に滿更關係が無い譯ではありませぬが、この頃は恩師や知己が澤山ゐられる御樣子＝公主嶺農事試驗場長の滿田さんは大學時代の同級。開拓研究所長の橋本傳右衞門さんも知人。又大陸科

學院長鈴木梅太郎博士は恩師で井上先生が洋行から歸られた時に鈴木さんは「外國人のやらないものゝ研究をやれ日本には日本獨特のものがある」と云はれ「米の研究を僕（鈴木博士）がやるから絹の研究は君（井上先生）がやれ」と云ふ譯で私先生が絹の研究を始めた」とか云ふ事です。

◎出世奇譚
北票の淸水さんは南は南洋、北は滿洲まで世步きし今は北票炭礦でものすごい幅をきかしてゐられる由、それでも結婚の折はホントに一文もなく〇〇さんより五拾圓を拜借に及んだとか。……等々。

× × ×

千曲川旅情の思出談は盡きざるも、名殘り惜しきまゝ、先生の之からの滿洲御旅行中の御健在を祈りつゝ紀念撮影をしてお別れしたのは夜更も十二時過ぎでした。（大山記す）

附記　當日の出席者とその寄せ書（順序不同）

湯川秀夫　林漢龍　唐澤正平
白澤幹　今井爽　池田正五郎
淸水徹敏　香山淸和　鷹野誠一
佐野忠二郎　本間國夫　古川正喜
宮坂收　松井懲二　岡卓郎
杉浦卓三　桐生義文　原治夫
宮內智　橋本衞　靑木幹夫
鈴木重孝　大山融　出野正雄
塚田典次　黑澤壽子　米澤はじめ
齋藤邦造

井上校長を迎ふるの記

たゞですら御忙しいのに、校長になられてからは尙更又一日だつてお暇がある筈がないのは萬々承知の上で御來滿を書面を以て膝詰談判で交々猛烈に强請した校長が「滿洲の人は凄いですよ」と述懐されて居たのも無理からぬ譯、然し

○會員も此前御來滿の時より十數倍に增えた。

○滿洲の柞蠶業も會員の手で基礎が出來今後の發展も約束されてゐる。、

○校長が十數年前より御研究の柞蠶絲の改良、新規用途の蘊蓄の披瀝は學界發展上極めて緊要である。

○母校に待望の纖維化學科が新設されたが既に滿洲では多數の會員が各種の纖維方面で活躍して居る。

○興亞の大精神、換言すれば大陸意識を母校の訓育に充分映して頂かねばならぬ、等々。

即ち來て頂くには最もいゝ時期である。御忙しい中を三週間割當して戴いた事は全滿會員の悅に耐えない處である。以下その御動靜のあらましを期す。

◎安　東

五月一日朝まだき大陸の玄關安東に旅の御疲れもなく颯爽と御安着。

恰も此の日は日露役皇軍安東入場の日であり亦安東神社の春祭の佳き日である。

朝食もそこ〳〵に早速關係方面歷訪午後は名勝鎭江山の靑葉若葉の間咲き亂るゝ櫻、梨を賞でつゝ安東神社に參拜又安東省次長宅にて關係官と歡談、夜は在安の同窓參集安東ホテルにて歡迎會（時報五月號參照）

翌日二日も關係方面を視察され、午後は省主催の座談會で「家畜、柞蠶纖維の本質の相違及合成纖維」に關し二時間ばかり講演あり、夜は「すみれ」の招宴に御出席。

三日朝安東發奉天に向はる。

◎奉　天

四日は關東軍西岡部隊、滿洲棉花株式會社、滿洲柞蠶株式會社奉天支店等を訪問された。

五日は奉天市內を見物され、夜は滿洲千曲會總會並に歡迎會に臨まる。別記

◎新　京

六日大陸の快速列車「アジア」にて飄風漂ふ曠野を突破、夕景新線の新京御着、長春時代と打つて變つた新京の大發展に驚かる。

七日朝鈴木大陸科學院長宅を訪問されそれより產業部、開拓總局、續いて大陸科學院を見學、鈴木院長親しく各部門を二時間半に亘り詳細案內說明さる次で關東軍を訪問され南嶺の戰跡その他御見物、夜は滿洲柞蠶會社の招宴に望まる。鈴木院長他關係官民多數參會

八日朝公主嶺農事試驗場に赴かれ纖維作物等につき詳細御調査、晝歸京し、ヤマトホテルに於ける新京千曲會の歡迎午餐會に御臨席、午後はヤマトホテルに於ける產業部主催の座談會にて安東に於けると同樣の講演を行はる。

夜は東京駒場會の歡迎宴に臨まる、集ふもの鈴木院長他七十名、盛會であつた。

九日朝元滿鐵農務課長松島鑑氏を訪ねそれより鮮滿拓殖、滿洲拓殖會社を訪問、晝は鮮滿拓殖の林君（鑑一）の御馳走になりそのまゝ哈爾濱に向け御出發新京より先は白澤君に御案內を賴みお別れす。

◎それより哈爾濱、佳木斯、牡丹江等の開拓地等を經、更に圖們、吉林、通化を經て新設の鐵路にて平壤に出で京城に御立寄りの上十八日歸田された。

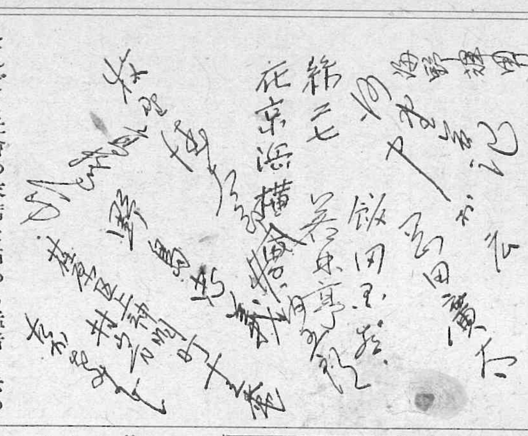
右に記す如く御來滿以來晝夜寸刻も暇なく各方面を歷訪され又立かはり入りかはり訪問の會員その他に應接され、普通の者なればヘトヘトになる處を校長は些の御疲れも見せず、絕えず御元氣に過され一同感謝感謝に堪えぬ所である。

（湯川記す）

在京濱絲二七會

六月八日（土）夜八時澁谷「ミュンヘン」に於て。

春も過ぎ、若葉の候。絲二七在京濱横級友一同會して胸のすくような話でもやつたらどう？　このてが終に實現したのだ。八日の午後七時澁谷驛のハチ公の前に集合、學帽と學生服をからりと脱ぎ捨てゝ全てが新しい背廣を着換へ、新しい「ソフト」をかぶり、社會への第一歩を强く正しく踏み出した者ばかり、「ヤアー」「ヤアー」と卒業以來の初顏合せの者が大部分、千年の昔に別れて、久し振りに話をするような感じ、集ふ者九人、横須賀からは、中村、竹内、横濱からは高尾、飯田、在京の者野岳、高橋、岡田河野、小田原からわざ〳〵馳せ參じた牧野、皆が皆ハリキリボーイの典型的な童顏のような青年。



それでも社會の末席を占める猛者と云つても差支へはあるまい。ハチ公の前では皆が圓陣を作つて三十分ばかりの雜談。八時から例の如き學生ボイさはぎも出來かねたが、短かくも樂しき二時間の會一人當りヂヨツキ二杯、酒豪もゐる、勿論下戸もゐるが下戸の分は上戸が代理する强者が弱者を助ける。「ミュンヘン」を終へて東京パンの階上で又會食。樂しき會はこれで無事終了。秋に定期會合を約し、吾等の前途に幸あれと祈つて解散。尚解散後登戸から海野、若林が遲くともかけ付けたが皆の者全部に面接出來なかつたのは殘念だつた。地方に居る級友よ、大いに元氣を出して歩めと吾々在京附近の者は叫ぶ、若し上京の節は誰でもよい一報すれば確かなる連絡のもとに會合が出來るのだ。

（秀木）

訃報

中岡　固氏　逝去

愛媛縣蠶絲課勤務中の中岡　固氏は六月七日突然逝去された旨同縣に居る河野辨太郎氏から母校林教授に通知があつた。謹んで御冥福を祈る次第である。

弔慰金募集

故齋藤修一氏（蠶廿四）
故久芳大三氏（紡十六）
故清水　清氏（蠶十九）
故齋藤利雄氏（蠶廿一）
故岡中　固氏（絲十二）

以上五氏に對し弔慰金を募集致します。故齋藤修一氏、故久芳氏、故清水氏、故齋藤利雄氏は八月末日、故中岡氏は九月末日迄に取纏め御遺族へ贈呈致したいと思ひますから夫れ〴〵に間に合ふ樣振替口座東京四三三四一番へ各故人に對する弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。

昭和十五年七月

千曲會

弔慰金報告（七月五日現在）

故鈴木鐵次郎氏弔慰金
金五圓也　今井　東　河合　英一
金參圓也　榊原鶴治郎　森山　二郎
金貳圓也　大箸　政平　都筑　賢吉
　吉川　誠彦
金壹圓也　鈴木　錬一　中根　眞一
右合計金貳拾四圓也
累計金七拾六圓也

故伊藤友次郎氏弔慰金
金五圓也　佐藤　一　宮澤　茂雄
金參圓也　井上　一郎
金貳圓也　香山　清和
右合計金拾五圓也
累計金貳拾七圓也

故植村滿義氏弔慰金
金貳圓也　大山　融
金壹圓也　岸　勝彌　加藤　沼二
右合計金四圓也
累計金九圓也

故高瀨毅一氏弔慰金
金參圓也　宮坂　收
金貳圓也　大山　融
右合計金五圓也
累計金拾五圓五拾錢也

故齋藤利雄氏弔慰金
金壹圓也　岩本　賢次　加藤　沼二
　矢野　進
右合計金參圓也
累計金七圓也

故齋藤修一氏弔慰金
金壹圓也　加藤　沼二　矢野　進
右合計金貳圓也
累計金五圓也

故久芳大三氏弔慰金
金拾五圓也　淺野　佐門　近藤　義信
　榊　信夫　福島　常
　細井　政吉　村橋　渙
金貳圓也　千曲會　柳澤　六平
金壹圓也　香山　清和
右合計金貳拾圓也

故清水清氏弔慰金
金五圓也　千曲會
金壹圓也　荻野　上風
右合計金六圓也

故中岡　固氏弔慰金
金貳圓也　荻原　清治　稻田　實
　窪田　潤

故齋藤利雄氏弔慰金（同級生扱）
金五圓也　荒木　喬　水谷　清
　大野　孝治
金參圓也　市瀨　武壽　百瀨　正
　石塚　亮　牧島　章吉
金貳圓也　傳田　靜夫　新野元治郎
　入佐　一郎
金壹圓也　蓮沼　光治　塚本　優
　中島　正喜
合計金參拾壹圓也

中岡君を追慕して

みのる

六月號の千曲時報の人事移動欄で君の簡單なる逝去の報を知り、半ば信じ、半ば疑つた。翌日學校に萩原兄を訪ねた時、たゞしてみたが詳細は全然不明ではあつたが、間違ではなく茫然としてしまつた。君が思ひ出は卒業後相寄る機會のなかつた十五年前の懐しい上田時代に遡り君の面影を追慕し、今は未亡人となられた奥樣のこと、幼なくして慈愛の父を失つた子供さんのこと、それから、あれへと、記憶をたどり、暫しの間偲び談らひ、あじきなき一抹の哀傷を共に味はつた。生者必滅の理法は、何人にも容捨なく、之を賦課するものとは云へ、前途春秋に富み、人生は正にこれがらだと云ふ時に君の如き有爲の友を失つてしまつたと云ふ事は誠に惜しまれてならぬ。

然も君との間に釀された感情の問題は、やがて、時が氏神の勞をとつてくれるものと其の日の來る事を心秘かに祈つておつたものを、其れすらもなし得ずに、幽明早く境を異にして、永へに別れてしまふとは、返す返すも殘念な事であり其丈に格別の心殘りがしてならぬ。

何んと云つても、東寮の同じ屋根の下に起居した一年間の生活こそ今となつては印象の深いものとなつてしまつた。級友からは、中岡君とか、固君とか呼ばれる變りに俗名の「コンチヤン」で通り其れ丈けに親しまれておつた君は、餘技としてよく尺八を嗜んだ。始めて君を知る誰しも一度は、あの痩身でよくまあ、尺八を上手に吹きこなすあれ丈けの肺活量が、一體どこに隱されておるのかと感嘆もし、不思議にさへ考へたものだつた。

其頃よく音樂を好む同志達により素人音樂會が催されておつたが、よく君もこうした會に出演しては、上田雀の話題を賑かしてゐたものだつた。それがとても得意の事でもあり、自惚の樣でもあつた。しか二年生の晩春の一夜であつた。君のうぬぼれを矯正する意味の芝居を企たが最後にいたつて遂に君の感好くところとなり、自尊心の强かつた君の事だから、とう〳〵、笑つて幕となるべき筈の名プランも筋書通りに運ばれる事なく喜劇ならざる人生の悲劇を生んでしまつたわけだ。此の結果が原因となつて君との交渉は此の日限りとして完全に絶たれてしまつたばかりでなく、淺間しい譯だがお互に反目さへ交へる樣になつて遂に今日まで過ぎてしまつた。

騒ぐわけでもなんでもないが、此の芝居にワキ役を買つて出た曾我君は卒業後間もなく不客の人となつたし、シテ役に祭り上げた君も今は歸らぬ人となつてしまつた。唯一人作者を買つて出た小生だけが信州の淺間山麓に殘つてゐるとは、實に感概無量のものがある。それ丈けに今となつては、却つて、こうした經緯があつたが爲めに、寂しい思ひ出となつて表はれ、そゞろ追憶の情禁じ得ないものがあるわけだ。敢へて思ひ出の拙文を捧げて、君の生前を偲ひ、併せて、摩訶苦波羅蜜多心經を綠松院雄心堅固居士となられた君に捧げて三唱合掌し、御冥福を祈る次第である（六、二七）

中岡固君を偲ぶ

（蛭田生）

中岡君が永眠されたとの訃報を、千曲時報によつて知らされた六月廿二日の夕私は呆然自失、遙か南方愛媛のかなたを伏し拜んで無限の悲痛を久しふした。君は未だ三十八、明朗玉の如き君の死が餘りにも突然であつただけにどうしてもそれが幽明境を異にしたとは思はれない

人生は朝露の如し、遠く想ひをいたせば去んぬる日、同じ愛媛の生んだ偉材曾我君を失ひ又こゝに俊敏中岡君を失ふとは。

今や世をあげて騒然たり、而して新秩序に向つて月に日に進む時、君の再起を望んで止まず、君の手になり企畫によるを多とせる蠶絲業を思へば又悲し、巨星の遂に地に墮つを人生の儚さを、深く感じ胸に迫るのみ。

想へば君は學業に秀で、端麗その姿ある處常に春風駘蕩たるものあり、よく千曲の邊りを愛し我等行を共にす、その淸き君の姿目のあたり浮ぶ。

君は又音樂をよくし早くより一家をなしその瀏喨たる音聲は未だに耳だを打つものあり、行く處可ならざるものなし。

されど天は二物を與へず生來健康に惠まれず、自ら留意するところあり。

學窓を出でては横濱松井商會に入社しその手腕を發揮し後官界に轉じ愛媛縣蠶絲課に入る、前途囑望せられ、人望厚くその地位たるや重しと聞く、宜なるかな。

然れども山丘重疊たる愛媛の國にありて交通の便全からず、朝に夕べに席の溫る時なき君、しかも健康に惠まれずとせば思ひ半に過ぐ。雄圖半にして斃るゝもこれによる。

嗚呼あの溫厚なる君、遂に黃泉の客となられ幽明境を異にし永久に溫容に接し得ず、御遺族の上に想ひを致せばさらに深き悲しみあり。

されど淸き正しき君の在りし日の、我等の感銘を御遺族に傳へんを、兄よ以て冥せられよ。

此處に謹んで哀悼の意を表し冥福を祈る

（六月廿九日記）

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
長野縣立小縣蠶業學校
中澤勝也

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
滿洲國奉天省西豊縣
國立柞蠶種繭場
原田種龜

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田市坂井田町
生絲之國社
市原文雄

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田市柳町　小宮山製絲場
小宮山太助

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田市鍛原町一九九五
醸造業
和田晋
電話上田四六一番

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田市笠原組製絲場上田工場
笠原正己
電話上田一三〇番

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
長野縣立屋代女子實業學校
金澤勇

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田市蠶影町
長野縣蠶種業組合小縣支部
傳田靜夫

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
廣島縣大竹町
新興人絹大竹工場
征矢克郎

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
宮城縣立亘理農蠶學校
戸塚一

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
滿洲棉花株式會社農務課
新京市大陸科學院在勤
塚田典次

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
蒲生俊興

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
倉澤美德

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
須田圭二

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
山口定次郎

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
細川豊

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
町田博

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
倉澤恒夫

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
清水傳

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
中島俊秋

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
瀧澤昌一

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
小川泰弘

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
松田眞二

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
瀧川春夫

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
小泉恭平

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
林貞三

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
窪田潤

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
荻原清治

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
大平正三

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
山崎嘗錄

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
滿澤佐俊

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
野口新太郎

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
小松忠一郎

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
阿久澤孝典

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
宮下丈夫

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
湯原諄

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
市村尚文

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
小林尚一

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
唐澤正

暑中御見舞
昭和十五年盛夏
上田蠶絲專門學校
白倉一男

會員動靜（七月五日現在）

清水運策（現職）（勤）　香川縣三豊郡粟島村官立粟島商船學校　書記
山田修一（舊職）（住）　長崎市中川町一二二
石橋順藏（舊職）（住）　東京市淀橋區西大久保二ノ一七九
今井又藏（蠶一）（勤）　山形縣最上郡新庄町　最上郡農會
古山宗八（蠶二）（勤）　從前通り（住）仙臺市北三番丁一一六番地稱田方
福富繁（蠶七）（勤）　鹿兒島縣大姶良村　鹿兒島縣蠶業試驗場大隅支場
窪田禎作（蠶七）　召集解除（勤）　高知縣長岡郡長岡村高知縣立農業學校
大高雄三（蠶九）（勤）　高知市北本町一ノ一〇四（住）
小松茂久（蠶九）（勤）　靜岡縣駿東郡御殿場町　靜岡縣立御殿場實業學校
長野縣下伊那郡座光寺村　長野縣蠶業試驗場飯田支場（舊四國支會）
山形新太郎（蠶一二）（勤）　群馬縣高崎市　群馬郡農會（六月號時報訂正）
仲内靜（蠶一二）（勤）　群馬縣新田郡尾島町　群馬縣蠶業取締所尾島支所
六川忠一郎（蠶一八）（住）　上田市海野町
太田元（蠶一八）（勤）　鞍山市立山　滿洲棉花株式會社立山工場（住）同上
沓掛久雄（蠶一九）（勤）　愛知縣東春日井郡鷹來村　鐘紡蠶業試驗所（舊東京支會）
森川博（蠶二〇）（勤）　熊本縣鹿本郡山鹿町　熊本縣蠶業取締所山鹿支所
大野孝治（蠶二一）（勤）　南支派遣中村（明）部隊
青木深（蠶二二）（勤）　東京市麹町區大手町　農林省經濟更生部總務課
東京市杉並區西田町一ノ七六八小池賢三郎方
（舊近畿支會）（住）

伊藤幸男（蠶二二）召集解除（住）上田市松尾町
出野正雄（蠶二三）（勤）新京市滿洲國々務院興農部農產司（住）新京南湖畔南湖寮二五四
小野忠（蠶二三）召集解除（住）長野縣埴科郡松代町裏柴町
清水傳（蠶二三）召集解除（勤）本校養蠶科圃場部（住）上田市田町
多田忠正（蠶二四）（勤）奉天省立鐵嶺國民高等學校
横内一郎（蠶二四）（勤）長野市三輪本郷四三番戶一
三原磊藏（蠶二五）（勤）宇都宮野砲兵二〇聯隊五中隊　見習士官
瀧澤七朗（蠶二五）（勤）宮城縣立加美豐蠶學校（舊北信支會）
山田次男（蠶二六）（住）長野縣諏訪郡長地村東堀
有川博（蠶二六）（勤）從前通り（住）長野縣南佐久郡野澤町取出五六一
土屋久雄（蠶二六）（勤）中支派遣甘粕部隊
柳澤一郎（蠶二七）（勤）仙臺市東北帝大理學部地質學古生物學科（住）仙臺市堤町九三後藤金太郎方
藤澤豊（蠶二七）（勤）朝鮮忠淸南道洪城　公立洪城農業專修學校
横田三平（絲二四）（勤）長野縣埴科郡屋代町　埴科社
藤井料（絲五）（勤）水戶市北三ノ丸一番地　保證責任茨城縣信用購買利用組合聯合會水戶出張所（住）水戶市下金町一五三番地
木藤富士雄（絲一三）（勤）東京市麴町區丸ノ內二丁目二番地一昭和林業株式會社（住）東京市澁谷區幡ヶ谷本町三ノ五七一（舊埼玉支會）
是石春男（絲一四）（勤）埼玉縣兒玉郡本庄町　昭榮製絲本庄工場（住）同上社宅（舊諏訪支會）
隅倉美義（絲一七）（勤）長野縣上高井郡須坂町　須坂商業學校（通信先）
小口勝三（絲一八）（勤）新潟縣北魚沼郡小出町　新潟縣繭檢定所小出支所（舊埼玉支會）
深澤潔（絲一八）（勤）上田市　日本勸業銀行上田支店（住）上田市鷹匠町
本間茂銳（絲一九）（勤）新京　滿洲國經濟部工務司工業科（住）新京特別市金輝路第二代用官舍一七五號
富岡正男（絲一九）（勤）東京市大森區大森四丁目　常國女子藥學專門學校（住）東京市赤坂區氷川町二七
小林進（絲二〇）（勤）京都府綾部町　綾部是試驗工場（舊鳥取支會）
服部彌一郎（絲二〇）（勤）岐阜縣廣見町　岐阜縣繭檢定所（舊鳥根支會）
三宅勳（絲二〇）（勤）岡山縣勝間田町　鐘紡勝間田工場（舊熊本支會）
宮田修（絲二五）（勤）埼玉縣大宮町　片倉試驗所（舊東京支會）
有賀正治（絲二五）召集解除（勤）富山市　日曹人絹パルプ富山工場（住）富山市中島一六番地　勤務先倶樂部
小松忠幸（絲二五）（勤）宇都宮輜重兵一四聯隊三中隊　見習士官
筑輪三治（絲二六）（勤）中支派遣甘粕部隊
高橋一郎（絲二七）（勤）東京市麻布區鳥居坂町八丁目一八〇　株式會社日立製作所龜戶工場課（住）東京市江戶川區西小松川二丁目九七四番地杉原盛次方
若林享（絲二七）（勤）從前通り（住）川崎市登戶二四六九元木方
秘田廣喜（絲二七）（勤）從前通り（住）三原市中通り三丁目八幡都一方
杉本政義（絲一）（住）富山縣上市町
坂本政雄（絲七）（勤）大阪市西區江戶堀南通一丁目　大日本紡績聯會檢査所（住）從前通り
菅尾源治（紡一五）（勤）和歌山市岡町九一　昭和紡績株式會社（住）和歌山市玉藻町二ノ五（六月號時報訂正）
金井忠義（紡一七）（勤）水戶陸軍飛行學校四中隊付　見習士官
柳澤柳二（紡一七）（勤）從前通り（住）神奈川縣茅ヶ崎町茅ヶ崎一三五九　伊藤ワサ方（名簿訂正）
園田信男（紡一八）（住）久留米市京町五丁目三〇七
中塚ミツ子（教四）（勤）橫濱市中區本町四ノ四三　三菱商事生絲部（住）東京市世田ヶ谷區世田ヶ谷三ノ二四二八　原井方
林正枝（教四）（勤）ナシ（住）長野縣小縣郡東鹽田村字古安曾
保科孝（教五）（勤）ナシ（住）長野縣北佐久郡橫鳥村山邊
相馬ナツ子（教六）（勤）ナシ（住）新潟縣北蒲原郡新發田町字材木町
廉澤クニ（教八）（勤）石川縣津幡町　石川縣繭檢定所

信濃路の旅に！
善光寺詣りに！
母校訪問の折に！
清流千曲川畔
戶倉温泉
千曲會指定旅館
笹屋ホテル
電話 戶倉 特長三番・一〇番 別館 一三番 別莊 一〇三番 上山田 三四番 一七番（料理部 案內所）
東京出張所 下谷（83）六六四五番

別所温泉
千曲會指定旅館
花屋ホテル
電話 三一三番 三一一番
柏屋別莊
電話 一二番
茶代廢止

御入信の節は
何卒御光來を！
上山田温泉
千曲會指定旅館
清風園
電話 上山田代表五六番 戶倉一六番 上山田一一四番
別館電話上山田一一四番

御靜養には
感じの好い別莊を
千曲會指定旅館
信州戶倉溫泉
上田館
電話 戶倉二七番

信州上山田溫泉
家庭風呂 浴室付貸別莊
圓山莊
電話 上山田圓一〇九番 戶倉七五番

編輯室より

△—旱天の爲にやほら神經を痛めてゐる時に漸く迎えられた雨は庚を過ぎて水害驚ぎ、何うもまゝにならぬものである。

△—先月號には野口敎授の「最近の支那棉業事情に就て」を得今回は曩に「蠶糞」を得て「滿洲視察概要」を深く「井上校長の長稿」を得た。最近特に關心を深くする吾々の大陸觀に貴重な資料を與へてくれる。

△—滿洲支會及び滿川氏の通信は「滿洲視察概要」を飾るに充分で、渡滿した時の心安さが感ぜられて有難い氣がする。

△—故齋藤利雄氏、故齋藤修一氏の戰死に對しては故兩氏を知る人をして殊に哀惜の情深からしめ先月號に已にて故兩氏に對して夫々二文宛追悼文が投稿された。其後故齋藤利雄氏に對して之を掲載した。

△—故齋藤修一氏に對して加藤沼二氏、上村賢造氏より藤氏、藤修一氏に對し夫々逃悼文が寄せられた。又故齋藤利雄氏より夫々逃悼文が望月氏、戶塚一氏に對して加藤沼二氏、上村賢造氏より藤氏、藤修一氏に對し夫々逃悼文が寄せられた。

△—本紙は別に先月號に於て募集廣告はしなかつたが少數であつても忘れずに申込まれる方があつて嬉しかつた。今後共御利用願ひたい。

△—本紙上に會員募集廣告はしなかつたが少數であつても忘れずに申込まれる方があつて嬉しかつた。今後共御利用願ひたい。

暑中御見舞申上候
昭和十五年七月
千曲時報編輯部
小松忠郎
町田博

優良蠶種御案內
◎昭和十五年初秋、晩秋蠶種（冷浸並に卽浸）
日一一五號 支一〇八號
日一一一號 支一〇八號
日一一一號 支一一二號
◎昭和十六年春蠶種
支二〇號 支一〇九號
日一九號 支一〇八號
日一四號 支一〇八號
廣島縣御調郡奧村字綾目
蠶種業 小川保
電話市村局十一番（甲本宅 乙蠶種部）
振替（廣島二四六番 大阪二〇七六三番）
（優良品種…適地適分場）
◎電報市村局別使配達料不要